

異文化理解のための新しい研究を期待する

一九七〇年の大阪万博の跡地に国立民族学博物館（民博）が創設されたのは一九七四年、一般公開は一九七七年であった。民博は博物館と同時に民族学の研究拠点でもあり、その第五研究部に「コンピュータ民族学」という部門が設置されていた。

まだコンピュータがそれほど世の中に普及していない時期で、ましてや大学の文系では使われる機会はほとんど無かった。当時いったい何をする部門か分かる人はほとんどいなかった。初代館長の梅棹忠夫氏はコンピュータの可能性をいち早く洞察し、これで旧態依然としている民族学に風穴をあけようとしたのではないかと思われる。機関全体をコンピュータによって改革する方針を打ち立てられたのであった。「ビデオテーク」もその一環であり、情報管理施設の設置による総合データベースの構築は他機関の先駆けであった。

私は一九七六年京都大学情報工学科の助教授から民博の助教授に転任した。民族学など全く知らなかった。東大の大林太良教授を代表とする共同研究「東南アジア・オセアニアにおける諸民族文化のデータベースの作成と分析」や、京大の石井米雄教授の「コンピュータによるタイ語古代法典（三印法典）の総辞索引作成」などいくつかの個

杉田 繁治

プロフィール
1939年京都府生まれ。国立民族学博物館名誉教授。京都大学工学部電気工学科卒業。「機械翻訳」で工学博士。情報工学科助教授を経て1976年国立民族学博物館に転任。研究部教授、部長、副館長を勤め2003年定年退官。その後、龍谷大学理工学部教授を6年間務める。著書「コンピュータ民族学」共立出版、1997年など多数。1971年情報処理学会論文賞受賞、1996年情報化月間通商産業大臣個人表彰。

別の情報処理に関係した。しかし「コンピュータ民族学」の役割は個別の研究にコンピュータを活用するだけに留まるものではない。むしろ研究方法としてコンピュータを如何に役立たせるかが問題である。

文化人類学は人類にとって大変重要な学問分野であるにもかかわらず何故かマイナーなものとしてしか捉えられていない。新しい問題意識と研究方法の導入が必要ではないか。四〇〇〇を超えるといわれる民族の生活様式と相互関係を明らかにする研究。各々の研究者は自身のフィールドでの研究をしているが、他のフィールドでのデータには疎いものである。あたかも全てのフィールドデータを自分が集めたデータのように利用出来る有効な比較研究方法を開発して新しい知見を得ることが出来ればより確かな言明が可能になる。

今や宇宙時代の人類学・文明学である。宇宙から地上の数センチの距離を画像で眺められる時代である。高速通信や人工知能の発達によるわれわれの生活をどのように捉えるか。そこで何を研究するのか。多様で異質な民族生活が共存する為の本場に役に立つ異文化理解の方法などを提言していく役割を果たす必要がある。

月刊
みんぱく

10月号目次

- | | |
|--|---|
| <p>1 エッセイ 千字文
異文化理解のための新しい研究を期待する
杉田 繁治</p> <p>特集 デジタル化するフィールドワーク</p> <p>2 「フィールドワークのデジタル化」時代
飯田 卓</p> <p>4 デジタル時代の親族研究
杉藤 重信</p> <p>5 地図とGPSとデジタル測量
寺村 裕史</p> <p>7 フィールドワークと会話分析
高田 明</p> <p>8 牧畜民による映像・音声コンテンツ制作の日常化
——アフリカにおけるデジタルメディアの受容
内藤 直樹</p> <p>10 ○○してみました世界のフィールド
記憶に残った一枚の写真
小林 直明</p> | <p>12 みんぱく Information</p> <p>14 想像界の生物相
鬼の目力
榎村 寛之</p> <p>16 新世紀ミュージアム
ネパール民族誌博物館
南 真木人</p> <p>18 手芸考
ネパールの異なるふたつのダカ織
高道 由子</p> <p>20 ながなんちゃ
育まれる「本当の名前」
左地 亮子</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|--|---|